まんがら茂平次

北原亞以子

まんがら茂平次

北原亞以子

新潮社

まんがら茂平次

著者　北原亞以子

発行　一九九二年一一月一五日

発行者　佐藤亮一

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地
株式会社　新潮社

電話　営業〇三(3266)五一一一　編集〇三(3266)五四一一
振替　東京四―八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

© Aiko Kitahara 1992, Printed in Japan

ISBN4-10-389201-3 C0093

目

次

まんがら茂平次　7
朝焼けの海　35
嘘八百　61
花は桜木　95
去年の夢　119
御仏のお墨附　149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

別れ　181
わが山河　209
女の戦争　239
正直茂平次　265
そこそこの妻　295
東西東西（とざいとうざい）　321

装画・蓬田やすひろ

まんがら茂平次

まんがら茂平次

ゆうべ、金を持って家を出たのがいけなかった。そろそろ縁を切ろうと思っていた女の家でつい深酒をし、前後不覚に眠ってしまったのは、なおわるかった。

昼近くになって目を覚ますと、懐の財布がない。とうに起きていたらしい女が、その財布を長火鉢の猫板の上に置いて、薄笑いを浮かべながら煙草を吸っていた。

あわてて取返そうとしたが、女は素早く煙草の灰を落とし、煙管の先で財布を押えた。熱い雁首が指に触れ、悲鳴をあげる茂平次を見て、女は、袢纏がずり落ちるほど軀を揺すって笑った。

ふん。大店の息子にしちゃあ、品のない声だね。——

だから、俺は勘当されて……。

ばあやの伜の家に厄介になってるってのかえ？　その次にゃ、お前の真黒な髪に珊瑚の簪をさしたら、さぞ映えるだろうが、ばあやの伜に借金があるって言うんだろう。聞き飽きたよ。——

何だと？——

ばれてるんだよ、この大嘘つき。鍛冶町の薄汚い裏長屋のほか、どこにお前の家があるってんだ。——

日本橋石町に店があると言ったなあ、わるかった。実は、俺が勘当されている間に、親父も身代限りをして……。

けたたましい笑い声が、茂平次の言葉を遮った。
わたしに着物を買ってくれると言ったっけね。いまに湯治に連れて行くとも言っていたね。それをみんなお断りするから、この財布はもらっとくよ。——
ふざけるな——と、茂平次はこぶしをかためた。小柄で、色白で、少々太りぎみ、さがった眉と二重瞼の目に愛嬌があって、いい加減古くなった川越唐桟の着物さえ取替えれば、大店の道楽息子に見えないこともない。だから女も、着物はばあやの伜からの借物という言訳けに納得したのだろうが、嘘と知れてしまったのなら気取っていることはなかった。それに、四畳半の座敷を丸く掃いただけで「くたびれた」と長火鉢の前に坐り込む女なら、取っ組みあいの喧嘩になっても勝てる自信はある。
「お前にやるくらいなら、どぶに捨てた方がましだ」とわめいて、一つや二つ、殴りつけてやろうと思ったのだが、うしろから男の声がした。ふりかえると、土間に浪士風の男が立っている。女の方も、茂平次と縁を切ろうと考えていたのだった。
男とは、喧嘩をしないことに決めている。茂平次は、五両もの金が入っていた財布を未練がましく眺めながら女の家を出た。
外は、昨夜からの木枯しだった。茂平次は、その風に吹き飛ばされるように神田鍛冶町へ帰って来た。
宝湯の角を曲がって、下駄新道に入る。下駄の台をつくる店が軒をつらねている中に蕎麦屋があり、蕎麦屋の裏に長屋の木戸があった。
木戸をくぐってから、茂平次は、朝から何も食べていないことに気がついた。もう九つ（正午）を過ぎているだろう。そう思ったとたんに腹の虫が鳴いた。が、茂平次の家には米櫃がなく、当然、米もない。空腹になっても、米をといでご飯を炊くくらいなら寝ていた方がよい性分なのだ。家の中には、米櫃どころか、茶碗も箸もなかった。
風が、路地を吹き抜けてゆく。二軒目の羽目板にたてかけてあった高箒が風に飛ばされて倒れ、三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

軒目の盥が漬物の樽にぶつかって、こちらへ転がってきた。

「くそ――」

盥を蹴返すと、袖の中で音がした。銭の音だった。釣銭を放り込んだままになっていたのかもしれない。茂平次は、夢中で袖に手を入れた。

が、幾度かぞえても、銭は十六枚しかなかった。ついこの間までは十六文で蕎麦が食べられたのだが、今は夜鷹蕎麦までが二十四文になっている。慶応と年号が変わってからの値上りは、まったくすさまじかった。

蕎麦のにおいが、路地の中まで漂ってきた。

腹の虫が鳴く。

それでも、茂平次の頭には、米屋から米を借り、炊いて食べようという思案は浮かんでこない。浮かんでくるのは、蕎麦の一杯や二杯、食べさせてくれる知りあいがいそうなものだという考えだけであった。

知りあいの顔をあれこれ思い浮かべてみたが、どれも、つい最近おごってもらった顔か、茂平次のつけにしかねない顔ばかりだった。たずねて行っても、なおさら腹を空かすことになりかねない。

「気前のいい奴は見当らない、それでも食わずにゃいられない、実に難渋この上ない――ときやがらあ」

みんな浪士のせいだ、そう思った。

浪士と呼ばれる男達が江戸に集まり出してから、ろくなことがない。このところ頻繁に起こっている付火や押込みは浪士達のしわざだというし、こっちは二十四文の蕎麦代に苦労しているというのに、奴等は料理屋で食い逃げをするらしい。おそらく、急激な値上りもそのせいだ。

茂平次は、唇を尖らせた。

値上りの原因は、生糸や茶などの産物を片端から異国へ高い値で売ってしまうため、国内で品薄と

なってしまうからだと、先日も仲のよい旗本の四男坊から嚙んで含めるように説明されたのだが、茂平次は内心、そんなことが原因ではないと思っていた。

商人達は、付火で家を焼かれたり、押込みに金を奪われたり食い逃げをされたりする損を見込んで、正札に高い値を書いているにちがいなかった。第一、品薄になると値が上がるというのなら、江戸に浪士が集まってきた分だけ、食べる物も着る物も足りなくなって値上りする筈であった。それに何より、浪士がいなければ、財布をあの女から奪い返すことができたのだ——。

蕎麦のにおいがする。

腹の虫が悲鳴をあげた。茂平次は、唾を飲み込んで、蕎麦屋をふりかえった。

やむをえないと思った。蕎麦屋の亭主をおだてて、御馳走になるほかはない。

が、木戸を出ようとした時に、忠助の顔が目の前に浮かんだ。

いた。——

金になりそうな奴がいた。

茂平次は、顔中に笑みを浮かべた。

しばらく会っていないので忘れていたが、駿河台には五百石の旗本、酒井左京の屋敷がある。酒井家も、酒井家の中間である忠助も、茂平次の世話になったことがあり、この窮状を訴えれば、一文もやれぬとは言えぬ筈であった。

茂平次は、寒さも忘れて裾を端折り、木戸の外へ飛び出して行った。

だが、酒井の屋敷は、くぐり戸こそ開いていたものの、雨戸がかたく閉ざされていた。庭をまわってみたが、屋敷のうちに人の気配はなく、幾日も掃除をしていないらしい庭の落葉が、波のような音をたてて風に吹き寄せられていた。

「どうしたってんだ」

勝手口にも錠がおりている。戸を揺すってみたが、やはり返事はなかった。
「くそ。俺を飢死させる気か」
錠がはずれぬものかと戸を蹴っていると、その隙間がかすかに明るくなった。手燭を持ってようすを見に来た者がいるのだった。用人かもしれぬと思ったが、戸の向うから聞えてきたのは、忠助の声だった。
「のろま。いるのなら、さっさと返事をしろい」
「てやんでえ。付火だ、人殺しだと物騒な時に、うっかり返事ができるものか」
戸が開いて、忠助が、色の黒い痩せた顔を出した。
「何が物騒だ。こっちはその物騒な中を、お前がさっぱり顔を見せねえから、心配になってようすを見に来てやったのだ。昼間っから雨戸を閉めきって、いったい何があったてんだ」
「相変わらずよく喋る奴だな。ま、そんなとこに突っ立っていねえで上がりねえ。みんな、上総の知行所へ逃げちまって、俺一人だ」
「逃げた？」
「ああ。いよいよ天朝様と公方様が喧嘩をするらしいぜ」
「戦さがはじまるのか」
茂平次は、板の間に上がった。足の裏に埃がざらついた。
「けど、わからねえな。公方様が喧嘩をはじめるって時に、五百石の直参が、何で知行所へ逃げて行きゃがるんだ」
「ちょぼくれにもあるじゃねえか。火事と戦さはくいたくないってやつさ」
「ふうん」
「お前も知っての通り、先代が今年の春に死んで、当主はまだ十一の餓鬼だろう。何でもおふくろの言いなりよ」

未亡人が戦さの噂におびえ、当主の病気療養を理由に上総へ行くと言い出したのだという。
「若様ってのは、情けねえな。十一と言やあ、俺は一人で食ってたぜ」
「俺だって、故郷の下野で、雇われ仕事をしていたよ」
忠助は、雨戸を閉めきった廊下を歩いていた。手燭の明りに照らしだされた廊下も、白く砂埃が積もっている。風が雨戸をしきりに揺るがして、静まりかえった屋敷にその音を響かせた。
「それにしても、こんな旗本がいちゃ、公方様も可哀そうだな」
「うむ――」
魚油のにおいが漂ってきた。閉めきっているので、昼間から行燈に明りを入れているのだった。
主人の居間だったらしい座敷の障子が、開け放しになっている。火鉢の上には蓋をあけた鉄瓶が白い湯気をたてていて、燗徳利が首を出していた。
忠助が酒とはめずらしい――と、茂平次は思った。酒を飲む金があったら田圃を買う足しにするというのが忠助の口癖で、おごってやると言われた酒を、金にかえてくれと言ったという噂すらあった。
忠助は、片頬で笑った。茂平次の胸のうちを察したようだった。
「俺も明日、故郷へ帰ることにしたのさ」
「また、急な話だな」
「お前にゃ、ずいぶん世話になった」
「それほどでもねえ」
と言いながら、茂平次は、ちらと忠助を見た。
酒井家の先代は、書画の蒐集に凝っていて、かなりの借金を背負ったまま急逝した。一時は、借金の返済をせまる高利貸しの声が、塀の外にまで聞えてきたという。茂平次は、忠助にこのままでは給金ももらえぬと泣きつかれ、ほとんどが偽物らしい先代の蒐集を、あちこちに本物だと言って高く売ってやったのだった。

あぶねえところだったと、茂平次は思った。明日、駿河台へ来たならば忠助もいず、空き腹をかかえてむなしく帰るところだった。

まったく、忠助にしても酒井家の用人にしても、下野へ帰ったり上総へ逃げて行ったりする前に、ちょっと挨拶に来たっていいじゃねえか。――

だいたい、偽物を本物にして売ってくるのに、酒井家から渡される礼金は少な過ぎた。無論、茂平次も売上金額の三割を骨折り賃として黙って差し引いていたのだが、小心なくせに欲深なところのある忠助は、すぐに無断骨折り賃のことに気がついた。そして、嬉しそうに笑いながら、口きき料を寄越せと言ってきたのである。はじめのうちは忠助の言いなりに、骨折り賃を剝って口きき料を渡していたのだが、次第にばかばかしくなってきて、代金はすべて用人に渡したとごまかすようになった。それが癪にさわったのかどうか、忠助は、茂平次の家に偽物の絵を運んで来なくなったのだった。

忠助は、火鉢の火をかきたてた。燗徳利の底に触れてみて、茂平次に渡した湯呑みへ酒をつぐ。雨戸がしきりに鳴っていた。

茂平次は、湯呑みの酒を一口飲んで、火鉢に手をかざした。こういうのが案外に器用なのだと言われた短い指に、娘のような淡紅色の小さい爪がついている。

「ところで、例の偽物の中に、文晁という絵師の掛軸があっただろう」

「ああ――」

忠助は、曖昧に頷いた。茂平次は、愛嬌のある目で爪を眺めていた。

「実はな、文晁なら十両出してもいいという奴を見つけてきたのよ」

「ふうん――」

「気のねえ返事だな」

「お前の渾名が渾名だからよ。十両ってのが、信用ならねえ」

茂平次は、首をすくめた。

「文晁なら、二十両にはなるってのか。冗談じゃねえや。ちょいと目のきく奴なら、すぐにそれとわかる偽物を、本物だと言って売ろうってんだ。騙されてくれる奴を探すのだって、ただじゃできねえんだよ」

忠助は、疑わしそうな顔をした。茂平次の舌がなめらかにまわりはじめた。

「川崎の旅籠の亭主なのだがな、こいつがお人好しをまるだしにした男で、おまけに南画だか北画だか知らねえが、墨で塗ったくった絵が大好きときやがるのよ」

目つきが穏やかで、頬の赤い男の顔が見えてきた。数年前にお大師様へお詣りに行ったきり、川崎へ行ったことはないのだが、その男が旅籠の帳場にすわって、あまり値打ちのありそうもない掛軸を広げていたのを、見てきたような気がする。

「川崎の旅籠か――」

と、忠助が言った。が、つづいて言いかけた言葉を飲み込んで、酒の湯呑みを口許へはこんだ。

「面白そうな話だが、あいにくだったな」

「どうして」

「あれは、奥方があらいざらい上総へ持って行っちまったよ」

「何だと」

茂平次は忠助を見た。忠助は、鉄瓶の下の火をのぞきこんだ。

「あの絵を、手前達で売る気なのか」

「そうだろうよ。俺達に差っ引かれる金が惜しくなったのだ」

茂平次は、薄い笑いを口許に浮かべた。忠助が、引越の荷造りの最中に、一幅や二幅の掛軸を隠しておかぬわけがなかった。

茂平次は、溜息をついてみせた。

「奥方も無茶をするぜ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.